初期松江城天守の形態に関する試論

-絵図、文献史料、天守に残された痕跡を通して-

和田嘉宥・稲田 信

1. はじめに

国立公文書館に所蔵される「出雲国松江城絵図」(重要文化財)は、正保年間に幕府に収納されたいわゆる「正保城絵図」の一枚である。著名な絵図ではあるが、城郭内に描かれた天守図は現在の松江城天守とは外観が異なり、二層目、三層目に「千鳥破風」が、四層目には「唐破風」が描かれている。他にも「水手門」など、現在の松江城郭施設とは異なる描写もあることから、地元の研究者の中では「実態とは異なるもの」と捉えられ、これまでは、現状とは異なる天守図に関連する研究が進むことはなかった。

しかし、近年の松江城研究において、「寛永15年時点で松江城が『竹内右兵衛書つけ』や『(天守)模型』のような姿であった、と断定するのは危険である」⁽¹⁾との見解も提示されており、元文年間から寛保年間(1738~43)にかけて天守が大幅に修理されていることが、昭和の修理の際に発見された墨書や、「松江藩列士録」や「天隆院(六代藩主宗行)年譜」の記録を通して確認されつつある(松江城修理関連年表参照)。さらに、城郭史研究者も、「出雲国松江城絵図」に描かれている天守の姿が、絵図の性格からして、「実態とは異なるもの」ではなく、より「実態に近いもの」を描写している主旨の発言をしている⁽²⁾。以上のことを契機として、初期の松江城天守の形態について検討を試みることとした。

2. 絵図に描かれた松江城天守

『松江市史』別編「松江城」編集のために集成した松江城郭絵図から、立体的に描写された天守図のみを抜き出し、制作年代順に並べたものが図1~11である⁽³⁾。年代順に並べてみると、「千鳥破風」が描かれるなど現在の天守と異なる外観をもつ天守図は、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」(正保年間:1644-47)(図1は天守部分)、「出雲国松江城之絵図」(延宝2年:1672)(図2は天守部分)の2枚であることが分かる。この2枚は天守を描写したものとしては最初期の2枚であり、細部まで丁寧に描きこんでいる。一方、簡略な描き方のものを除けば、「松江城郭図」(図4は天守部分、元文3年:1738)以降の天守図は現在の天守の外観に、より近い。これまでの見解とは異なり、「出雲国松江城絵図(正保城絵図の一)」、「出雲国松江城之絵図」の松江城は初期の天守の姿を描写したものである可能性が強いと考えられる。

なお、幕府収納図である「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」には、松江藩家老乙部家に伝わって「控図」とされてきた「松江城正保年間絵図」(図12は天守部分、乙部正人氏所有、松江歴史館蔵)があり、同じく「千鳥破風」が描かれるなど現在の天守と異なる外観をもつ天守図が描かれている。今後の検討を要するが、この乙部家伝来の「松江城正保年間絵図」は、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」より松江城・城下町の実態に即して描かれた絵図の可能性が強く、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」の元図(下図)、あるいはその写しとなるものだろう。

なお、いわゆる「正保城絵図」は、正保元年(1644)に幕府が諸藩に命じて作成させた城下町図で、城下の町割、山川の位置や形が実状にあわせて掲載されており、街道から城郭に至る主道には太い朱線が太く引かれている。さらに、城郭部が他より拡大されて描かれており、石垣の高さ、堀の幅や深さな

どの軍事情報も詳細に記され、郭内の建物については、櫓や多聞と合わせて天守も描かれている。各藩 は幕命を受けてから数年で絵図を作成し、幕府はこれを早くから紅葉山文庫に収蔵していた。幕末の同 文庫の蔵書目録によると131鋪が所蔵されていたが、国立公文書館には現在63鋪が所蔵されている。

現存する「正保城絵図」63鋪は、描き方に類似性があり、幕府の統一的な制作基準に則して描かれた と見なされていたが⁽⁴⁾、個々によく見ると、それぞれ描き方に相違があり、時代的に見ても、各藩で独 自に描かれたものと思われる。

今一度、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」の天守を見よう。天守は層塔型の五層であり、また、外壁の仕上げは、各階共に上部が白色(白漆喰)、下部が着色(下見板張)して描かれている。破風の描き方も、現天守は2階の大屋根が「入母屋破風」であるが、「絵図」の天守にはやや大きめの「千鳥破風」に描かれている。そして、前述したように、二~四層に「千鳥破風」や「唐破風」が描かれ、現天守とは異なる姿となっている。

「正保城絵図」は城下全体を描いた城下絵図である。「天守がどこまで正確に描かれたか」については、 今後、さらなる検討が必要であるが、「城絵図」と表記されていることに併せて、城郭部分が大きく描 かれている。城下より城郭部分を、より克明に描くことが求められていたのだろう。その中で「出雲国 松江城絵図(正保城絵図)」の松江城天守は、他の「正保城絵図」のどの天守よりも、屋根の形や外壁 の仕上げなどの描写は鮮明である。

「正保城絵図」では、「実態に近い」天守の姿を描くことも求められていたと考えられるが、「出雲国 松江城絵図(正保城絵図)」の天守の描写は、他藩の城よりも大きく優れた城であることを幕府に強く 示そうとしてより丁寧に描かれたのではなかろうか。

3. 天守に残る貫跡

「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」に描かれた二層目(内部2階)、三層目(内部3階)の「千鳥破風」 部分、四層目(内部4階)の「唐破風」部分を、現在の松江城天守内で確認しよう。

まず、古柱が残る内部 2 階東側には、「石落とし」を挟んで左右(南・北)の古柱 4 本に内部から「貫跡」が確認でき(図13,14)、そのうち 1 本の背面(外側)には、外側に向かってほぼ水平だったと思われる横架材を架けた「貫跡」(「横架材貫跡」)が観察できる(図14、図20のろー4)。また、大修理の際に写された「松江城天守維持修理工事写真」(松江歴史館蔵)の中には、解体中の 2 階東側外面の写真もあり、修理前の状態をさらに詳しく確認でき、さらに、「横架材貫跡」を繋いで縄が張られている写真もあり、これらは二層東側の南北「2つの千鳥破風(比翼千鳥破風)」を示唆する(図15,16)ものである。これら「横架材貫跡」の位置は、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」に描かれた二層目東側の「比翼千鳥破風」の描写と矛盾しない⁽⁵⁾。

また、「松江城天守維持修理工事写真」をよく調べてみると、解体中の2階西側外面を写した写真(図17)があり、「二ら四」の柱にも、2階東面同様に「横架材貫跡」が確認できる。これによって、西面にも東面同様の「千鳥破風」があったと見なすことが出来そうである。

そして、図18,19は解体中の2階北側外面を写したものであるが、1本の柱には「横架材貫跡」が確認できる。この「横架材貫跡」の痕跡から二層北側外面にも千鳥状の破風が付いていた可能性も考えられる。それらを平面図上に図示したのが図20である。

なお、内部4階の東西の古柱にも、「貫跡」が確認でき、東側は3本の古柱に、西側は2本の古柱に「貫跡」が残されている(**図21、22**)。これもまた「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」に描かれた四層目の「唐破風」の描写とは矛盾しない⁽⁶⁾。但し、その高さについては検討が必要である。

4. 文献史料にみる外観の変化

城郭図に描かれた天守(図1~12)と、柱の「貫跡」の存在から、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」 (正保年間:1644~1648)、「出雲国松江城之絵図」(延宝2年:1672)に描かれた天守の姿を初期の松江 城天守の姿に近いものと想定してみると、これまで知られてきた文献史料も別の見方ができる。

一つは、17世紀後半に現在の形になったとされる「竹内右兵衛書つけ」(松江市指定文化財:松江歴 史館蔵)⁽⁷⁾で、文中には正徳3年(1713)までの年紀も記されている。文中の天守の記述の一部に「二 重目也西二破風有り」とあるが(図23)、「破風有り」の記述にあえて朱線を重ね「見せ消ち」されてい る。これまで、あまり注目されなかった修正箇所ではあるが、「竹内右兵衛書つけ」に松江城城郭の部 が記された時には天守には「破風有リ」であったが、後にこれを抹消するような状況になったと考えれ ば、実はこの記述は城郭図に描かれた天守の変遷と矛盾しないこととなる⁽⁸⁾。

また、松江城を「千鳥城」と明記する近世の史料には、「松江亀田山千鳥城取立之古説」(元禄元年 (1688) には原形となる本が成立か)、「明和四年亥改め」との付記がある「雲陽大数録」(明和4年 (1767) から天明2年 (1782) 成立)、「出雲私史」(文久2年 (1862) 頃か)がある。そのうち、「出雲私史」には「地を亀田山といひ、城を千鳥城といふ、皆旧地名に依れるなり」とあり、「千鳥城」の名称も「旧地名に依れる」としている。しかし、「千鳥城」の名称が旧地名に由来しそうな関係史料は確認できず、初期松江城天守には「千鳥城」と呼べる理由(「千鳥破風」)があったが、外観の変化(「千鳥破風」の撤去)により、藩儒桃節山が「出雲私史」を著した文久2年頃には、既に本来の名称由来が分からなくなっていたとも考えられる⁽⁹⁾。

5. 元文3年より寛保3年の天守大修理

松江城は、築城から百余年後の元文3年(1738)より寛保3年(1743)にかけて、江戸時代最大の改修が行われていると見なされる。(表1参照)。

『宗衍年譜』元文三年三月十一日条(島根県立図書館所蔵)によれば、「是日 月相府ニ告ルニ 雲藩 松江城ノ天守 年ヲ遂テ 損スルコトヲ致シ 五層皆朽ルニ至ル 故ニ漸之ヲ修ムト云ヲ以ス」とあ り、元文3年(1738)には、月相府(幕府)に届け出て天守の修復を行ったことになる。

また、昭和の天守解体修理に際し、「御奉行竹内左助 大工〆杉谷徳兵衛 御大工斎田彦四郎 元〆 佐野治助 立田孫兵衛 (元文四乙未)四月九日 棟梁 村木忠兵衛」の墨書が見つかっているが、この墨書により、元文4年 (1739) 4月に行われた天守屋根 (四重)の修理時には、竹内左助が (御破損)奉行、斎田彦四郎が御大工であったことが分かる¹⁰⁰。なお、「松江藩列士録」によれば、竹内左助は寛保3年8月18日に「御天守御修復御用出精仕付而為御褒美御帷子一銀五枚被下之」とあり天守修復に精を出したので褒美を受け、斎田彦四郎は同年同月2日に「御目見格被仰付」とあり御大工として御目見格に進んでいる。

以上の記録等から、現在の松江城の外観となる改築(二層の千鳥破風の撤去、四層の唐破風の撤去、 東西の大破風への改修など)が或る時期に行われたとすれば、この元文3年から寛保3年の間の大修理 に伴って行われた可能性が極めて強いと考えられる。

なお、斎田彦四郎については「松江藩列士録」には、享保3年(1718)に「御天守小形拵差上付而為御褒美二百疋被下之」とあり、「天守小型」(天守の模型)を拵え、褒美二百疋を貰っている⁽¹¹⁾。そして、その翌年には天守の水改め(天守の傾きの調査)が行なわれ、同時に柱に包板が添えられていることが昭和の修理の際に発見された墨書によって確認されているが、これらのことから、松江藩では、享保期に入ると、天守の修理を具体的に検討しはじめ、同時に柱に包板を添えるなどの補強的な修復も行なっ

ていたのである¹²²。なお、天守修理の必要性については、既に、正徳 6 (1716) に幕府に修理願いを行なっていたようでもあり¹³³、この頃の天守の状況についてはさらに検討が必要であろう。

6. まとめ

本稿は、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」に描かれた天守図をきっかけに、初期松江城天守の形態についての検討を加え、試論として著したものである。これらのことから、松江城天守の外観について整理できること、推測できることは次の点である。

- ① 「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」(正保年間:1644~1648)、「出雲国松江城之絵図」(延宝2年:1672)には二層目東(おそらく西も)、三層目南(おそらく北も)に千鳥破風が描かれ、四層目東(おそらく西も)に唐破風が描かれているが、「松江城郭図」(元文3年:1738)以降の天守の図には二層目、三層目の「千鳥破風」は描かれていない。このことは、松江城天守を描いた絵図を見る限り、天守の姿は、17世紀に描かれた天守と、18世紀以降に描かれた天守とはその形態が異なることを示唆しているものと考えられる。
- ② 現在の松江城天守の古柱を詳細に見ると、二重目東側には「千鳥破風(比翼千鳥破風)」があったことを示す「貫跡」が内部2階東の4本の古柱に4か所残っている。このうち1本の「貫跡」背面(外側)には、外面に向かってほぼ水平だったと思われる横架材を架けた跡が確認出来る。また、現在の内部4階東及び西の落床(いずれも2坪)の境の柱にも、「貫跡」があり、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」四層東側の描写(唐破風)と矛盾しない。なお、二層目東側の「千鳥破風(比翼千鳥破風)」については、昭和の大修理の際の記録写真(図15)等によっても裏付けられる。(記録写真には二層西側、二層北側でも「貫跡」が写っており、昭和の大修理前にはその痕跡があったことが確認できる)
- ③ 17世紀後半に現在の形になったとされる「竹内右兵衛書つけ」には、天守の記述として「二重目也西二破風有り」と、「破風有り」の記述にあえて朱線を重ね「見せ消ち」している。これは、「竹内右兵衛書つけ」が成立した時には天守には「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」に描かれたような「破風」があったが、後にこれが撤去されたことを示唆しているのかもしれない。「竹内右兵衛書つけ」の「見せ消ち」、朱書部分については、今後、さらなる検証が必要である。
- ④ 松江城天守は、記録(墨書、家譜、列士録等)から、元文3年(1738)より寛保3年(1743)にかけて大規模な改築が行われたことが確実である。従って、現在の松江城天守の姿は、修理後の天守の形態を伝えるものであると見なされ、初期松江城天守の形態が、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」の天守に描かれている姿に近いものであるとすれば、千鳥破風、唐破風などは、元文3年から寛保3年にかけて行われた改築工事の際に撤去された可能性が強いことになる。

なお、初期松江城天守の形態に関連する今後の検討課題である。同時期に描かれた「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」(国立公文書館蔵)と「松江城正保年間絵図」(乙部家蔵)も、よく見ると、懸魚や鯱等は描き方に違いが見られる。また、松江城天守を描いた絵図全体を通して言えることは、外壁の表し方が、下層(一層、二層目)が下見板張で、上層(三層目、四層目)が白漆喰である現状の天守と外壁とは異なって、各層ともに下部が着色され、上部が白色であること、つまり各層共に下部が下見板張で、上部が白漆喰の表現になっていることである。これも絵図に従えば、外観が何時の時点かに、現状のように変更されたことになる。松江城が描かれた絵図について、今後も調査研究を深める必要がある。「松江城天守雛形」(松江市指定文化財:松江歴史館蔵)もよく見ると2階の大破風は、ただ屋根に乗

せてあるだけで、構造的には一体になった「入母屋破風」とは異なる作りになっている。作成年代及び その作成理由も含めて、改めて、模型の構造形態に関する調査研究が必要である。「竹内右兵衛書つけ」 の「見せ消ち」、朱書部分については、今後、さらなる検証が必要である。

「千鳥城」の名称についても、その由来は明らかになっていない。初期松江城天守の形態に由来した 可能性を提起するが、今後の課題である。

注

- (1) 西和夫2011 『松江城天守調査研究報告書』松江市(研究受託者神奈川大学)
- (2) 平成27年10月に開催された史跡松江城保存活用計画策定委員会で、委員の一人から資料に掲載された「出雲国松江城絵図(いわゆる正保城絵図)」の天守の絵図について「この絵図には変な天守が描かれているが、これは本当に松江城か。こうありたいと思った姿か」という質問があった。筆者(稲田)は事務局側の一員として参加していたので、かつて旧知の城郭史研究者から「出雲国松江城絵図」について聞いた、「実態とかけ離れた天守を描いて幕府に提出したものでは」という言葉を念頭に、「松江城郭絵図のうち、天守が描かれたものは点々とあるが、デフォルメされたものもある」と返答したが、その委員会に参加しておられた中井均氏から、「これは正保年間に(正保城絵図は)、幕府に提出するために描かれた城絵図(城下図)なのでインチキは書けない。」との指摘があった。この指摘をきっかけに初期松江城天守の形態について検討を始めることとなった。
- (3) 図1は、正保年間に描かれたもので、現存する「正保城絵図」63点の一(国立公文書館蔵)。図2は、石 垣修復の場所を記した城郭図で、図の右下には「延宝二年寅九月朔日 松平出羽守 御判」とある。城郭は 「出雲国松江城絵(正保城絵図)」に倣って描かれており、天守の形態は図1とほぼ同じである(松江歴史館 蔵)。図3は、松江藩の家老職を勤めた三谷家に伝わった絵図で、藩用図の一種とみられる。絵図の所々には 農業、漁撈、自然の景観描写が施されているが、天守を含む建物の描写はやや雑である(三谷健司氏蔵)。図 4は、図面の上左端に「旧城内分廻り 惣間数大凣七百八拾間 此町数 拾三丁四間 明治五申九月兵部省 江差出ニ付扣置」と記す貼紙があるが、外曲輪(二之丸下ノ壇の南惣門の正面にある「天守鍵預」の建物に 「松田七左衛門居所」と記されているところから、松田七左衛門が天守鍵預を勤めていた享保4~5年(1719 ~20) 頃に制作されたものとみなすことができる。また「松江藩列士録」斎田彦四郎には「同五庚子年年三 月 日不知 御城内分限絵図被仰付出来差出付而同八月 日不知 為御褒美二百疋被下之」とある。この絵 図が本図とすると、作者は斎田彦四郎ということになる。なお、本図の城郭の描き方は建物の大きさ配置な ど全体に正確である。天守は四層天守で、南面に附櫓が付き、二層目屋根の上に入母屋が乗り、破風の下の 壁中央には火燈窓が付いている。南正面の姿が描かれており、現天守と同じである。また、本図は制作年以来、 建物が取壊され、また新たに建てられる度に、貼紙が貼られ、また、上書きされたことが確認されるが、18 世紀年代より明治5年(1875)までの本丸・二之丸・三之丸の状況を記す図として貴重である(国文学研究 資料館蔵)。図5は、図の左下に「出雲国松江之城石垣元文二丁巳年十二月二日破損所之伺(中略)元文三戊 午七月 松平幸千代 印」とある。天守は附櫓を備える五重であるが、二重目屋根の南と東に大破風が乗り、 四重目の南と東に火燈窓があり、図1、2とはその様相が異なる(松江歴史館蔵)。図6は、松江城下町絵図 群の中でも最も良質な絵図で、武家地には各屋敷割に家臣名が記されている。城郭内も比較的詳細である(島 根県立図書館蔵)。図7は、図の左下に「出雲国松江之城石垣破損之覚(中略)安永二癸巳七月 松平出羽守 判」とある。天守の描き方は図5に倣っている(東京大学史料編纂所蔵)。図8は、図の左下に「出雲国松江 之城石垣破損之覚(中略)安永七戊戌八月 松平出羽守 判」とある。天守の描き方は図5に倣っている(松 江歴史館蔵)。図9は、兵法伝授などのために作成されたと考えられるが、城郭内は主要な建物も割愛されて おり、天守もかなり簡略化されている(国立公文書館蔵)。図10は、左下に「出雲国松江本城外廻北西之方当 古甚不締ニ付河岸江高サ壱丈之木柵朱書之通新規取建申度奉願候以上 元治元甲子年六月 松平出羽守(花 押)」とある。天守の形態は図5とほぼ同じである(国立公文書館蔵)。図11は、明治8年(1875)以前、松 江城内の建物が残る様子を元松江藩の大工棟梁であった安立房次郎の監修のもと描かれたとされている。軸 装で、画には「松江亀田千鳥城 明治八年五月廃城」、箱書きには「明治四十二年十二月 安立房次郎ヨリ献 上」とある。「安立房次郎ヨリ献上」という言葉から類推すれば、安立氏から旧藩主松平家に献上したものと

考えられ、正確な制作年は分からないが、明治8年以前の松江城内や天守の様子をかなり正確に描いた可能性は高い(松江歴史館蔵)。図12は、図1が幕府に提出された本図とすると、その元図(あるいは図1と共通の下図を写したもの)と見られる図である。五層の層塔型天守の形態は図1と同じであるが、千鳥破風には懸魚が描かれず、鯱も天守最上階の屋根に描かれるだけである(乙部正人氏所有、松江歴史館蔵)。

- (4) 矢守一彦は「これを見る者に〈画一的〉な印象を与えるのは、単に幕府の統一的な作製基準に則っている のみでなく、清絵図(正本)を制するにあたってはほとんどの場合、幕府御用の狩野派絵師に筆を煩わせて いるからである」(「幕府へ提出の城下絵図について」)と記している。
- (5) 天守2層の「千鳥破風」の存在については、昭和25年から30年にかけて行われた昭和大修理時にも指摘さ れており、昭和大修理の現場主任井上梅三氏は、『重要文化財松江城天守修理工事報告書(重要文化財松江城 天守修理事務所1955)』「便所および人質蔵の痕跡について」に「天守東側(北寄、南寄)および西側(南寄 り) 二階柱(番付ち-20、た-20) 及び(ち-2) にかかる出梁鼻木は他の出梁鼻と異なり前方へ長く鼻延 びとなっている。この出梁下の柱面を棟木として左右各二本の柱に屋根形に当る位置に差し桁と思われる木 口彫りの仕口の痕跡が存していた。(西側、北寄柱は明治の修理に取替えられて痕跡なし)これ等柱の仕口彫 りの三点を結ぶと干鳥棟の形式をなし、当初は千鳥破風が初層屋根についていたものの如くで、仕口は一度 使用した形跡が明らかで、釘穴も存していた。また前記出梁鼻と千鳥の棟との関連性があるようでもあった。 元文の古絵図には千鳥破風があり、念のため現在の実測図にこれを当てはめてみたが、千鳥棟としては取合 が悪いが、若しこの所に千鳥があったとすればそれは軒千鳥破風であったであろうが、資料が乏しく結論を 得るに至らなかった。」と記している。松江歴史館に所蔵されている須田主殿編『城郭史から見た松江城天守 と昭和の修理』にも、「千鳥破風」についての記述がある(資料1)。なお、昭和大修理時の「松江城天守維 持修理工事写真」(松江歴史館蔵)を見ると、2階東側外部の柱4本に横架材を差込んだ痕跡が確認でき、こ の痕跡に合わせて南北2か所に千鳥破風を思わせる三角状の繩が張られている。これを受けてだろう、昭和 26年(1951) 10月22日付島根新聞は、「二層に"千鳥破風"の跡 延宝以前の原型に設計変更か」の見出しで、 文化財保護委員会文部技官服部勝吉氏の調査により、天守二層の東西に二つの千鳥破風が取り付けてあった 跡が発見されたと報道している(資料2)。ところで、南から2本目の柱の背面(東面)は石落としとなって いるため、「貫跡」の背面(東面)にはほぼ水平と思われる横架材を架けた跡が確認できるが、この柱に巻か れている帯鉄は壁漆喰を塗る(石落としの袴を東面に添える)前に柱に巻かれているので、かなり早い時期 に柱に巻かれていたと考えられる。
- (6) 残された記録を見る限り、これまで内部4階の東西の古柱にある「貫跡」について注目されることはなかった。しかし、井上梅三氏は、『重要文化財松江城天守修理工事報告書』「二重屋根妻立の位置」に、「三階東及び西側の側面中央部は二重屋根入母屋の妻部となっており、この妻部の内側一尺六寸の位置に東西面とも松八寸、八寸の古い東路梁と想われるものと、その梁の上にはさらに松七寸、八寸の材を重ね、根太受けとなっていた。前記の東路梁?には一間毎に東穴が彫ってあり、現在は単なる根太受けの役をしているのみであったが、当初の妻立位置は現在の如く破風ではなく一支、一尺六寸内側の前記東路梁の位置に建っていたものではなかったか?他の南北張出建の入母屋の破風は、妻立位置より二尺五寸外部にあり形式が違っている。(もっとも南北張出建以外は各屋根共破風は妻建際) 前記の東路梁の東穴は一度使用した痕跡があり、またかかる大材を何等意味もない不必要な位置に架設してあったことは疑問があったが、他にこれ等を裏付けする資料は発見されなかった」と記しており、三重屋根の東西にある大破風は、現在より一尺六寸(約48cm)内側にあり、使用した痕跡のある東路梁と東穴があるとする。その理由を、西和夫氏は『松江市ふるさと文庫16』「松江城再発見」で「破風を大きく恰好よく」見せるためと説明する。が、同時に、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」に描かれた四層目の「唐破風」あるいは「千鳥破風」を撤去し、現在の「東西の大破風」を設ける改修工事による痕跡とも考えられる。

松江城天守内に残る「貫跡」については、壁面側の古柱の多くが後の改修で取り換えられおり、現在、全てを確認することはできないが、天守壁面側の古柱を内部から確認したところ、内部2階の東側の古柱、内部4階の東西の古柱以外には、内部2階南側の古材2本に各1か所認められるのみだった。内部2階の東側の古柱、内部4階の東西の古柱に残る「貫跡」は、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」に描かれた二層目の「千鳥破風」、四層目の「唐破風」の存在とあまりにも矛盾せず、偶然とは考えにくい。

(7) 和田嘉宥2012「《解題》『(竹内右兵衛書つけ)』」『松江城研究1』松江市教育委員会

- (8) 「竹内右兵衛書つけ」に「二重目也西二破風有り」と記されていることは、この史料の成立時には二重目にある破風は西側のみで、「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」、「出雲国松江城之絵図」に描かれた東側の破風は既に失われていたのかもしれない。また、一層(重)目の記述にある「北桁上端通二腰屋根有リ」も気になるところである。他にも「竹内右兵衛書つけ」には天守の破風に関して、「三重目也 西二破風在り」、「四重目也 南北二破風有り」とある。五層(重)目の入母屋破風については記述されておらず、ここに記された「破風」とは「千鳥破風」のことであろうか。なお、「竹内右兵衛書つけ」には、地階から五層(重)までの略平面が描かれているが、その内、附櫓・二層目の石落とし、穴倉(地階)から1階への階段、三層(重)目の屋根裏、四層(重)目の階段及び踊場等は朱線で描かれている。「竹内右兵衛書つけ」における天守の記述については、これらを含めて、改めて検討する必要があるだろう。
- (9) 松江城を「千鳥城」と記す近世の文献史料は、史料編纂課で調べる限り、今のところ「松江亀田山千鳥取城取立之古説」、「雲陽大数録」、「出雲私史」の3点のみである。今日、「千鳥城」の名称由来は不明瞭であるが、「松江城を『千鳥城』と呼ぶのは初期松江城天守の外観(千鳥破風)によるもの」、という仮説が許されるとすれば、その後、城の外観の変化とともに「千鳥城」の名称由来が分からなくなったとも考えられる。明治以降に広域的な名称を付す過程で、「雲陽大数録」、「千鳥城取立古説」、「出雲私史」、あるいは口伝などから、「松江城」とともに「千鳥城」と一般的に呼ぶようになったのではなかろうか。「千鳥城」の名称については、初期松江城天守の形態に由来した可能性を提起するが、今後の検討課題である。
- (10) 「松江藩列士録」によれば、竹内左助は享保16年(1731)正月に御破損奉行を仰せ付けられ、斎田彦四郎は享保10年(1725)12月に御大工を仰せ付けられている。墨書は、『重要文化財松江城天守修理工事報告書』に記載され、松江城天守地階に保管されている。
- (11) 斎田彦四郎が作成した「天守小型」がどのようなものかは分からないが、これまで竹内宇兵衛の作とされ、様々な製作年が指摘されてきた「松江城天守雛形」(松江市指定文化財)は、この大改修を行うために作られた模型で、実質的な製作者は斎田彦四郎という可能性が考えられる。今後の検討課題である。
- (12) 須田主殿編「城郭史から見た 松江城天守と昭和の修理」(松江歴史館蔵)には、「包板の表面に『享保四年亥十月此墨改(水改め)』の文字と墨書が存していたが、創建後百九年を経過した享保の頃に水改めが行われた事は建物の傾斜は勿論柱の不同沈下が相当著しかった事が窺われる。」と記されている。また、天守の修理については「天守の修理としては僅かに延宝、元禄に懸魚の修理が行われている他は享保以前に修理が行われた記録がなく享保の包板が最初であり水墨は包板施行後のものである。その後の修理としては元文、寛保の年代に相当大規模な修理が行われたことは今回の解体により発見された墨書により明らかであり、この時代に包板も或程度付加えられたことも想像に難くない。」と記されている。
- (13) 歴代の『松平家家譜』を見る限り、幕府へ提出する天守修復の届けは、元文3年(1738)以外には確認できないが、松江市誌[上野富太郎筆写本]享保頃の記事(中島桐之助蔵書)に、

「元文三戌午年三月十一日

一、御天守所々及破損候二付連々被加御修復度段、松平左近将監殿へ 御届書如左、

口上之覚

出雲国松江城天守近来所々其分ニて難差置候故五重共朽損候所連々修復申付候、依之御届申候、以上

三月十一日 御名

右御書付望月知角持参用人坂源七対話相渡候処先格も有之御届候哉与相尋候二付先格無之正徳六申年二月三日先二井上河内守様へ此度修復 [虫] 有之伺届之訳奉得御内意候処別紙写之通御座候由申述候、源七より申候者此河内守様より御渡被成候御書付暫借承、先格之儀、左近将監殿御尋候て見せ申渡旨且又此書付者月日等も無之間弥書付認差出候様申付而則認直し同日又々坂源七迄差出候処、追而御返答可被仰聞候由源七より申聞、

享保元丙申年二月三日

御天守御修復之儀ニ付而井上河内守殿へ被得御内意候ニ付御渡し御書付如左、

天守斗修復候者以絵図被相伺候不及候間、勝手次第可被申付候被改修覆候ニ付而石垣など取崩候儀 も候ハン以絵図可被相伺候、

右河内守殿より御渡被成候書付勉乞添書付如左、

正徳六申年天守修復有之伺届之訳不相聞候、右井上河内守様へ奉得御内意候処、同年二月三日別紙

之書付御渡被成候、以上、

松平松千代留守居

の記事がある。筆写本で、原本は確認できないものの、『宗衍年譜』で確認できるように、元文3年3月11日、 天守修復の届けを幕府[老中松平乗邑(左近将監)]に出すが、既に正徳6年(1716)2月には老中井上正岑(河 内守)に天守修理届けを出し、許可を得ていたことが分かる。

[本稿は、初期松江城天守と千鳥破風について整理を試みたものである。今後、松江城の調査研究を進めるうえで重要な視点と考え、初期松江城天守の外観は「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」、「出雲国松江城之絵図」に描かれたような形態ではなかったかと想定し、ご叱正を覚悟であえて提起した。今後とも、識者の御教示を仰ぐ次第である。

本稿作成にあたり、中井均氏より「出雲国松江城絵図(正保城絵図)」について貴重なご指摘を、卜部吉博氏からは、千鳥破風に関する記事情報(資料2)を、福井将介氏からは「松江市誌〔上野富太郎筆写本〕享保頃の記事(中島桐之助蔵書)」(奥村久雄氏所蔵)に関する情報をいただいた。また、松江城天守の調査にあたって、松江城山公園管理事務所に便宜を図っていただいた。記して感謝いたします。]

*絵図の外観から見た天守の層を(一層、二層、・・)と、天守内部の階を(内部1階、内部2階、・・)と便宜的に表記した。

(わだ よしひろ 米子工業高等専門学校名誉教授) (いなた まこと 松江市歴史まちづくり部史料編纂課課長)



図 1 出雲国松江城絵図 (正保城絵図:国立公文書館蔵) (1644~1648)



図2 出雲国松江城之絵図 延宝2年(1672)

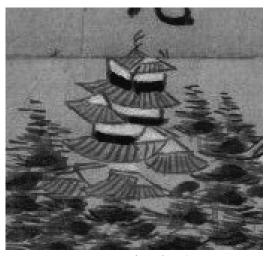


図3 松江城及城下古図 天和3~元禄5年(1683~1692)

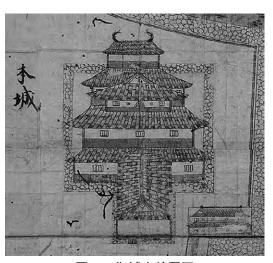


図4 御城内絵図面 享保4~5年(1719~20)頃

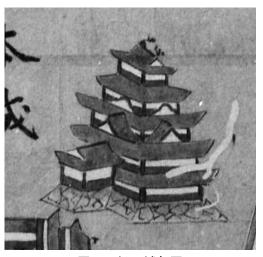


図 5 松江城郭図 元文 3 年 (1738)



図 6 松江城下絵図 元文~延享年間(1736~1748)



図7 諸国城郭修復図 安永二年(1773)



図8 松江城郭古図 安永7年(1778)

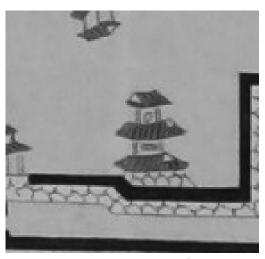


図9 雲州松江 (乗命) 江戸中期頃



図10 出雲国松江本城図 元治元年(1865)

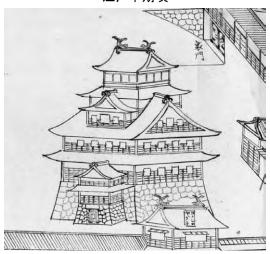


図11 旧松江城之図 明治42年(1909)



図12 松江城正保年間絵図 (正保城絵図:乙部正人家蔵) (1644~1648)



図13 天守内部2階 東側北「貫跡」(白丸) 千鳥破風(点線)



図14 天守二階 東側南「貫跡」(白丸) 千鳥破風(点線)

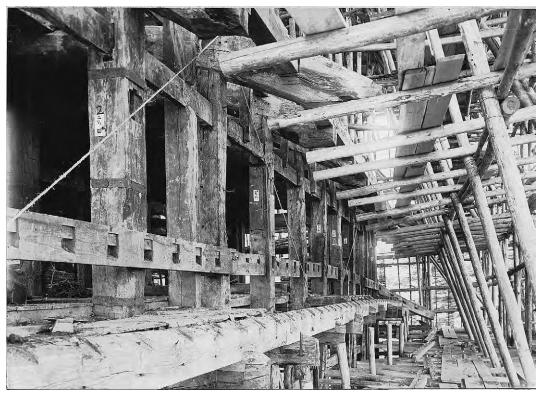


図15 修理時の天守2階東側外面1 (2か所に綱が張ってある。手前の柱は図20の「ろ4」)



図16 修理時の天守2階東側外面2 (横架材貫跡のある柱は図20の「ろ14」)



図17 修理時の天守2階西側外面 (手前の痕跡のある柱は図20の「ら4」)

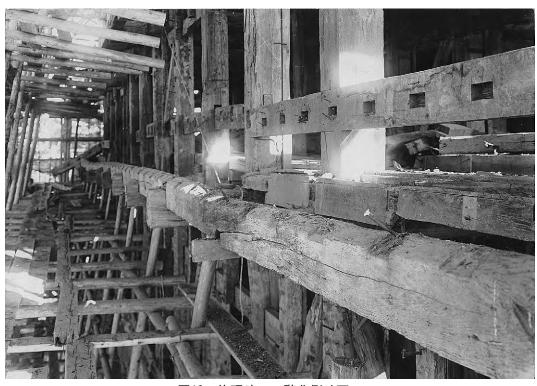


図18 修理時の2階北側外面1 (右から4本目の柱上部にも横架材を挿した痕跡がある)

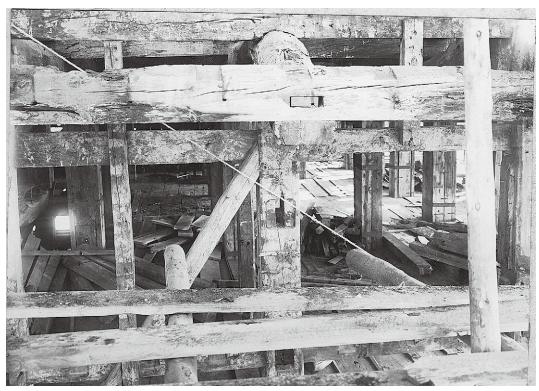


図19 修理時の天守2階北面2 (横架材貫跡のある中央の柱は図20の「か20」)

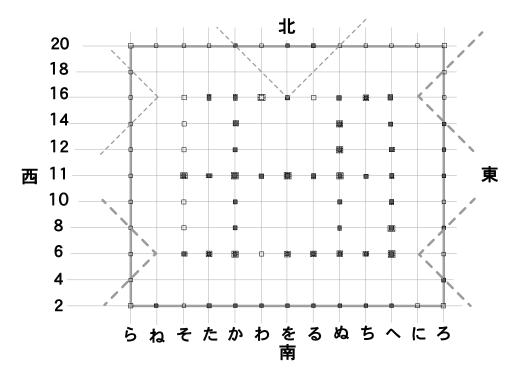


図20 痕跡から推定できる天守2階の破風位置図

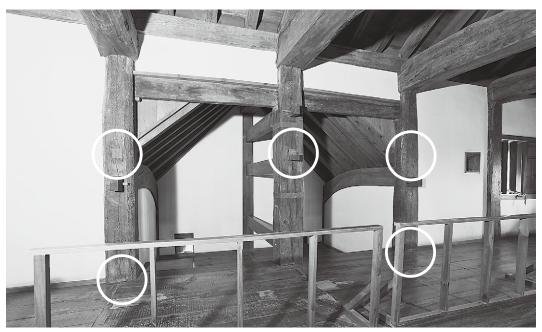
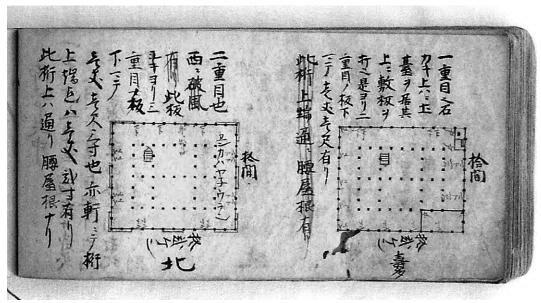


図21 天守内部 4 階東側「貫跡」(白丸)



図22 天守内部4階西側「貫跡」(白丸)



「竹内宇兵衛書つけ」の内、「二重目也西二破風有り」の記載部分

かくの如き状態であるから千鳥棟があったものと想定して実測図に

理において柱や梁等を取り替えられて居るから東側の如き出梁はな -75×67 梁があったが、西側は明治の大修 東側には北と南とに貳ヶ所に出 大破風になったものか明確な記 ば、いつの時代に現在の如き東西 ない。もし千鳥棟があったとすれ の絵が実写か想像図か明らかで には千鳥棟が描かれて居るが、此 まいかと想像される。延宝の古図 史料がないから判明しない

棟の形状をなし当初は千鳥破風が初重〈二重月〉 にあったのではある

柱面に中心柱から各二間宛振り分けに(梁間四間)枘穴が存して居た 左右に屋根形に差桁の木口彫の仕口跡が柱に残って居る。又南北二階 が、解体前から問題として入念に調査したが鼻延の出梁を中心として 初重〈二重〉屋根東側出梁の内弐本鼻先を長く延ばしたものがあった

左図■柱には棟木と思われる仕口穴が存し、是れ等三点を結ぶと千鳥

前述の如き事実は解体の時に西側と南北側とには之れを認めなかっ 證の発見によって解決されるべきものと思う あてはめて見ても屋根に納まらないから此千鳥棟については今後確

た。

須田主殿編「城郭史から見た 松江城天守と昭和の修理 資料1 p. 829~p. 832」記載の千鳥破風に関する記述。 〉内の斜字による修正文は筆者(和田)附記。



城の姿は型がかわり、姿はさらに 記見され、もしてれが原到に復原 もなつて天守二倍の東西に二つの 部技官服部勝吉氏の嘴盃によって 五日米県した文化財保証委員会文 千鳥破風が取りつけてあつた跡が されている。この千鳥破風跡は十 されることになれば見なれた松江 性重さを増すのではないかと注目 ているところから、その間の修理 敗戦の時に取りはずされたのでは ないかと見られる

の千鳥破風の大きさなどが明らか 城の姿に再現したいものだが、そ か。出来れば延宝古図による松江 で取りはずされたのではなかろう 安政古図にないのはその間の改製 股部技官談・延宝古図にあつて

われる全国警察官交通コンクール 大会に
島根県を代表して
国理本部 層ラダ通謀吉田一郎巡査が出場。

クールで東京へ 百田巡査交通コン

二十四日東 京銀座で行

いしていりでくっての資料を集めても

松江城の軽体修理の進ちよくにと一つたことが明らかにされているの一らつている。土地柄だけに繋ばく に安政の古図にはそれがなくなう一であると思われた松江城にてんな 一千鳥嵌風があるのはその当時の城 のデザインとしてはコツたものだ られてあつた破風の想像図) 局域は白線が延宝年間に取付け

松·江城

資料2 昭和26年10月22日付 島根新聞記事

松江城天守修理関連年表

西暦	和曆	<u>*</u>	記載内容	墨書及び資料名
		-	竹内有兵衛(中略)御御殿前より遥に天守を見上げて、南の方幾	『藩祖御事蹟』
			尺幾寸傾かりといへり、其事御聴に達し、御しあべあれば、果た	1.2.2.11.17.2
			して違はず、それより天守の御修復を命ぜれしかば、有兵衛先づ 天主の雛形を作りて御修復に取懸り、遂に思ふ如くに成功を成せ	
			y	
1676	延宝	4	延宝四年卯月口口 大工 口口左衛門	附櫓破風にあった懸魚鰭の墨書
1700	元禄	13	□禄十三年庚辰四月 大工 伝七作 同 喜兵衛	懸魚六葉裏の墨書
1718	享保	3	御天守小形拵差上付而為御褒美二百疋被下之	『列士録』斎田彦四郎
1719		4	享保四年亥十月 戌六月口口此墨改、享保四年 亥十月 此墨改	1階の柱〈を-六〉包板の墨書
			享保四年 亥十月此墨改 まき手二つ	1階の柱〈わ−六〉包板の墨書
			享保四年亥十月 昭和十六年一月調	3階の柱〈た−六〉包板の墨書
1720	l	5	(三月) 御城内分限絵図被仰付出来差上付而同八月御褒美二百疋被下之	『列士録』斎田彦四郎
1737	元文	2	元文二 午四月廿四日 御天守口口	1 階北東側にあった木片の墨書
1738		3	元文三 午 四月廿八ヨリ取付 原田六左衛門 笠井平次 大工 伊原清八 広頼喜兵衛 午 十月廿九日二書之	5 階根太掛木片の墨書
			(三月十一日)是日月相府二告ルニ雲藩松江城ノ天守年ヲ遂テ損スルコ ト致シ五層(重)皆朽ルニ至ル故ニ漸ニ之ヲ修ム	『宗衍年譜』
			元文三 午四月廿八ヨリ取付 大工 原田六左衛門 笠井平次 伊原清 八 廣瀬喜兵衛午 十月廿九日二書之	5階根太掛の木片の墨書
			元文三年午六月十四日	5 階の化粧垂木包板の墨書
1379		4	元文四年未ノ四月四日 宮次富治 大工 彦助	4 階木片の墨書
			(表)御奉行竹内佐助 大元〆杉谷徳兵衛 御大工斎田彦四郎	4 階東南隅木打付木片の墨書
			元 ダ 左野次助 立田孫兵衛 四月九日 棟梁 村木忠兵衛 (裏)元文四乙未四月九日に此角木出来仕上ル 大工 山門磯口口 口 広瀬新左エ門 笠井平次 斎田徳左衛門	
			(表) 元文四年四月廿日 檜皮中満といふ (裏) ひかわ中満 十兵衛 市右衛門 左ゟ 源四郎 市太郎	4 階曾木の墨書
			五郎 〆 六人 □林 斎田徳 元文四年 六月廿一日□□□	 4 階南張出(千鳥東)隅木の墨書
			元文四	4階の束にあった曽木の墨書
1740	實保	1	(表) 寛保元年 酉年 (裏) 檜皮 権四郎 酉五月卅日	4階にあった曽木の墨書
1741	30 111		(表) 寛保二歳 (裏) 経本市右衛門 大工新之助 書	4 階屋根北西曾木の墨書
			。 寛保二 戌六月 日 大工 傅太 大工 清太 熊井氏	華頭窓敷居の墨書
			· (八月十八日)御天守御修復御用出精付而為御褒美御帷子一銀五枚被下	『列士録』竹内佐助
			之 	
		_	寛保二此品□□□□ 	2階の柱〈ぬ-十四〉包板の墨書
		-	亥四月廿九日 大工 定次作	4 重北西に在った曽木の墨書
1815	l .		文化亥六月十四日 未口谷吉 文化一二	5階東棟木受木材の墨書
1847			(九月九日)御本丸辰巳櫓御普請中精出就相勤為御褒美銀三両被下之」	『列士録』勝部丹蔵
	嘉永	-	嘉永三 戌六月改済	1階の柱〈わ-十一〉包板の墨書
1870	明治	3	明治三歳己三月十四日 折廻三方角木取替致候 大工 棟梁善七 肝煎 次市 御大工 橋本万吉 銀七 広助	4階北東側の木片の墨書
			明治三年已三月十四日 此所屋根仕舞仕候 此節御役人 御大工頭 山村平蔵 馬場作右衛門 御大工 布施賢六 橋本傅三郎 諸払 土岐仁右衛門 肝煎 次市 喜一事 橋本傅三郎 萬吉 大工 銀七 広助熊太郎 右人別折廻三方角木取替致候	
			明治三年巳三月十四日 此所屋根仕舞致候 此節御役人 御大工頭 山	4階東側の北にある木片の墨書
			村平蔵 馬場作右衛門 倒大工 布施賢六 橋本傅三郎 諸払 土岐仁 右衛門 城普請 恩田林蔵 諸請負 岡田林蔵 大工棟梁 善七 肝煎 次市 蔵一郎事 橋本伝三郎 萬吉 大工 銀七 同 熊太郎 右人別 折廻三方角木取替致候	
1894		27	明治廿七年秋 天守閣大修繕之際 棟梁 白石伊蔵 寄附	 附櫓鬼板に取付られた銅板の裏板の墨書
			明治廿七年六月壱日ヨリ大修繕ニ着手シ同年九月三十日竣功 棟	2階東北の負隅木の墨書
			梁白石伊蔵 肝煎神谷務右衛門 大工方佐々木儀太郎 間田武二郎 小川万太郎 大工梅太郎 浅野武一郎 佐々木定太郎	